
ある転生者の験聞録

マリーの煙草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある転生者の験聞録

【コード】

N0050Y

【作者名】

マリーの煙草

【あらすじ】

転生した少年が農業を中心にいろいろなことを見聞、体験するお話です。

プロローグ

プロローグ

「おい、マルフォ」

私が家の裏にある畑を耕していると父に呼ばれた。

「どうしたの？」

耕すのをやめ、鍬を持ったまま父のほうへと向かった。

「お前が前に提案した機械で安定して材木が作れるようになったから、ある程度なら自由に使っていていいぞ。」

「本当に！」

「ああ、ただし、無駄にはするなよ。」

苦笑しながら父が言うことを聞きつつも

「わかってるよ！」

と言いながら作業場へと駆けている私がいた。

私の名前はマルフォ。この世界に生まれて12年になる転生者である。

私が私であると自我を持ったのは5歳のころのことで、両親曰くそれまではおとなしいが物覚えの良い子供だったとのことである。

自我がすっかりとし、生前の記憶もはつきりした当初は混乱し、整理がつくまで数日ほどぼくっとしていたがその後は、今まで以上に手伝いを積極的にする子になったとは親の言である。

私の住むところは山と川と森に囲まれた集落でおよそ300人くらいが暮らしている。

周囲の集落に比べれば比較的大きな集落だ。

町のすぐ近くの川には小さいながら港もあり、このあたり一帯の積

み出し港にもなっている。そのため町には商店や鍛冶屋などの職人街もある。

かく言う私の父も職人で、町の製材や木工品作成の責任者的な立場にいる。また、山や森の木を切り出したり管理する立場にもある。そのため家は集落の端、山の裾野にある森のすぐ近くに作業場と併設してたっている。また周囲には鍛冶屋や陶器職人の作業場などもあり、職人街のような一画になっている。

私は自我が戻る前から色々な職人たちの作業場に入りさせてもらい、簡単な片付けなどの手伝いをしながら邪魔にならないよう遊ばせてもらっていた。そのため職人の人たちにはよく知られ、可愛がられている。

記憶を取り戻してからも前と変わりなく生活を送っていたある日、私は母に連れられて村の共同の精米用の水車小屋へ来たときのことだ。私はそれまで精米所はまだ危ないと言うことで連れてきてもらえなかったが、今回は「五歳にもなったから大丈夫でしょう。」と母が言い、連れてこられたのであった。

元の世界、それも先進国ではまずあり得ないがこの世界では子供も立派な労働力なのである。

さて、精米所と聞いてピンときた人もいると思うが、驚く事にこの集落一帯の主食は米なのである。もつともジャポニカ種のような粘りのある中粒種ではなく、インディカ種のような粘りのない長粒種ではあるが。

その米を油で炒めたあと煮て炊き、それに豆を塩でじっくり煮たものをかけて食べるのが一般的な主食だ。閑話休題。

さて、場面は戻って精米所である。私は精米といっても杵突きによる精米だろうと思いがらついて行ったが、水車小屋に入ると驚いた。何故なら杵突き臼以外に水車軸の先に歯車がついた石臼があっ

たのである。

歯車の付いた構造物は見かけによらず精密な加工が必要である。これを見た私はこの世界の技術力は考えていたほど低くはないと確信したのである。

「…ルフォ、聞いているの？マルフォ。」

その後歯車に気を取られている私を母の声が現実を引き戻した。そしてもう一度精米のやり方を説明され実際に精米作業をやらされた。作業はまず臼に玄米を入れ、藁で編まれた輪を臼の中に取り付け杵を吊す綱をはずす。そして玄米が白くなるまで待ち、白くなったら綱を引いてつくのをやめる。臼にある米は糠と米が混じっているの最後に箕を使って糠を飛ばす。だがこの箕の使い方は簡単に見えてかなり難しく、慣れないうちはかなり米を飛ばすだけで糠を飛ばすことができない。なので今は米をつくまでが私の作業となった。作業が終わるとその日は家に戻った。

その後、私は家の手伝いをしながら同世代と遊ぶこともそっこのけで今まで以上に家の作業場に入りするようになり、職人たちの手伝いを積極的にするようになった。

この行動は両親を少し心配したようだか私の好きなようにさせてくれた。

そして七歳になったある日私は木っ端片に書いたずを持ち前から考えていた装置の提案を父に行った。

「父さん、ちょっと提案があるのだけど。」

「どうした？」

「これなんだけど…」

そう言いながら私は木っ端片に書いた図を見せた。

「これ精米所の水車を見て思いついたのだけど、これを作れば製材が楽にならないかな？」

それは水車を動力とし、歯車で変速して鋸を上下させる製材装置で

あつた。

この世界では材木の値段も高い。それは製材を人力によって行うからだ。私は自由に材木を使えるようにしたいがため、この機械の提案を行ったのである。

当初は帯鋸を提案するつもりでいたが、鍛冶屋に出入りしていた際、現状では長い鉄板でも半間（約90cm）ほどの長さしか作れないため押し鋸型の機械を提案したのである。

私の説明と図を見た父は始めは啞然と聞いていたが、説明が進むにつれ真剣な顔をして思考していた。説明が終わると父は「こんな事を考えた事もなかったが、これは一考に値する。職人たちと相談した後今度の代表会議で提案してみよう。」と言い、すぐに作業場へ向かい職人たちと話し合いに入ってしまった。

その後、集落の会議でこの提案は受け入れられ、二年の歳月をかけて完成した。そして冒頭へと戻る。

私はこのときを待ちわびていた。材料がなければ私がしたかったこともできなかつたからだ。だがようやく念願かなって木材を自由に使うことができるようになった。これでかねてからやりたかった養蜂を始めることができる！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0050y/>

ある転生者の験聞録

2011年10月29日00時10分発行